

なかま

家にて サンダーはもう 風景に
猛禽の 舞う林あり 緑なり

行事予定表

6月1日	避難訓練 運動会打合せ
6月8日	燦々プロジェクト (APテストについて)
6月15日	JASL スピーチコンテストと卒業式 総務オフィス会議
6月22日	漢字検定 理事会
8月17日	休み明け授業開始日

決めること 続けること

現地校の学年末と夏休みを間近に控えています。クラブ活動や習い事、宿題など山ほどやることはありますが、何事もやると決めて、それを続けることで、結果がついてきます。様々なコンクールもあります。それぞれに決めて、挑戦していきましょう。



中島和子名誉教授 (トロント大学 継承語研究) の調査報告書 (『月刊海外子女教育』4月号掲載) の一部 (「 」で示す) を紹介します。

保護者の声として「算数や理科など、二つの言語で同じ内容の学習をすることなど、思考力の発達にも役立っていることを実感しています (小5 女兒)」、「二つの言語を使って学習することによって脳がよく働くように思います。言葉を学習するだけでなく、その言葉で何かを学習することにより、いっそう深い部分が活性化されると思います (小6 女兒)」が紹介されている。「複数の言語に触れて育つ場合、小学校低学年までは二言語の使い分けの習慣づけが家庭でも学校でも必要ですが、年齢が上がるとともに、強い方の言語をどう活用して学習効果を上げるかということも考えるべきでしょう」「保護者が二つの言語のどちらも大事という姿勢をくずさないことが子どものバイリンガル育成には大切なことが分かります」「日本語を書くことが英語の作文力にもプラス、英語を書くことが英語作文力だけでなく日本語作文力にもプラスという互助的、相互依存的关系が見られました」「この調査ではっきり分かったことは、海外で高度の文章力を育てるには、小学校高学年から中学にかけての家庭での支援が必要だということです」

プリンストン日本語学校新聞



平成26年度 No.09号

平成26年 6月1日

文責 長尾重範 nagao@pcjls.org

日本の学校 (10)

「PTA」

国立大学は独立行政法人になり (1999)、半ば企業のように利潤、採算性、成果を求められるようになりました。高等学校も公立学校を維持するよりも私立学校に補助金を出す方が行政としては安くつくし、少子化の進行が予想される今日では、新しい公立高等学校が作られることは難しくなりました。それでは小中学校も同じように私学重視になるかという、国の政策が反映されにくくなるので、それはないだろうというのが大方の見方ようです。

その小中学校の枠組みも変化し続けています。その一つが PTA のあり様です。一番大きい要因と考えられるのが、主要構成員である母親の就業率の上昇でしょう。東京などでは PTA の組織そのものがないという学校も多くなっていると聞きます。

私の勤めた地域 (広島県) では、会長さんはお寺さんとか婦人会の役員さんなどが推薦されてなったり、その経験者が市町議会議員になったりすることは珍しくなかったです。数十年前には PTA 役員さんと先生との協力関係が強く、一体感があったのです。様々な難しい事案が発生した場合に PTA 会長が親や地域と学校の間に入ってうまく収めるようなこともあったでしょう。

しかし年と共に、働く母親が多くなり少子化が追い打ちをかけ、PTA の役員を引き受ける人が少なくなっていきました。世間は少しずつ、責任をどうとるのか、事故保証はどうなるのかという、ある面殺伐とも思える社会になり、学校を地域で守っていこうという関係は多くの場合に崩れていっていると思います。

かつては生徒指導から広報や庶務にいたるまで多くの役員体制があり活況を呈していた活動も、PTA 新聞の廃刊や委員会の廃止などに追い込まれ、以前の活気は失われているように見えます。それまで地域としっかり結びついていた学校も、今日ではかなり孤立した組織になっているのは一部の地域だけではないように思うのです。例えばクレイマーのような存在をいさめるべき人も組織も少なくなり、何か困難な事案が発生した時には学校以外の組織に依存しなければ收拾がつかないことも増えてきています。そのようなことが、先生の意欲を損ねたり、先生になりたい人が減ったりすることにつながると思えば、決して望ましいことではないように思うのですが、逆戻りはできないのです。

日本の義務教育は内側から確実に変化していると思います。